# 自然

**ここでは自然に少し触れてみましょう！**

## 川

### ■帷子川（かたびらがわ）

帷子川は、横浜市旭区若葉台に源を発し、旭区、保土ケ谷区、西区の市街地を西から東へと貫流し、横浜港へ注ぐ都市河川のひとつです。上流部では二俣川、中堀川、新井川等の支流を合流し、下流部では今井川、石崎川、新田間（あらたまがわ）等の派川を分合流する流路延長約17km、流域面積58平方 km²の二級河川です。

明治以降、帷子川は横浜を代表する地域産業「捺染」を育てた川でした。帷子川はちょうど横浜市域の真ん中を横断するように流れています。

▲よこはまの川と下水道より
（横浜市環境創造局提供）

**COLUMN**

## 帷子川の由来

帷子川という名前の由来についてはいくつか説があるようです。

現在の天王町一帯は昔、一方が山で他方が田野で平らな地形をしていたため、片平「かたひら」と呼ばれていました。その中を流れていた川を「かたびらかわ」と呼んでいたそうです。また漢字の「帷子川」については1480年（文明12年）の太田道灌（おおたどうかん）の平安　紀行に「帷子」という地名（現在の天王町付近）があり、現在の帷子川はここからきたものとされています。

他にも海が入江になっていたことから「潟（かた）」と呼ばれ、これを転化したという説、または、地形が衣料の帷子に似ていることからという説などがあります。（@Hama_seikatsu さんのツイートより）

## ■滝の川（たきがわ）

滝の川の水源は、近郊にある六つの溜め井であると言われ、「片倉うさぎやま公園」内にある池の湧き水がその一つです。昔は本牧の千代崎川、保土ヶ谷の帷子川と並んで横浜の三大悪川といわれ1931年（昭和6年）の区画整理で改修されるまでは毎年秋の出水期になると必ず東神奈川うら、平川町、二ツ谷、反町付近一帯は洪水に見舞われ田畑や民家などが水浸しになったそうです。

この「滝の川」はかつて*権現（ごんげん）山の山上からひとすじの滝が流れ落ち、滝川となってこの川に注いでいたそうです。このため、この川を「滝の川」というようになったとの説があります。その滝つぼには、数百年も生きているカッパがいたといわれています。

＊戦国時代に上杉氏と北条氏の合戦になった場所で、山の名はその後、熊野権現が建立されたことにちなんで名前が付けられました。神奈川台場の建設の際に土砂を得るため、かなり掘り崩されました。現在の幸ヶ谷公園周辺

▲滝の川

▲横浜市河川図

COLUMN

## カッパ伝説

滝つぼの主であったカッパは、近くの東海道に出かけては旅人にいたずらをしたり、馬から荷物を奪っては馬子を困らせていました。ある日、神奈川宿に住んでいた剣術使いの浪人がそのカッパをつかまえると、カッパは涙を流しながら「わたしには夫がいましたが、去年、大蛇に決闘を挑まれ、殺されてしまいました。残された二人の子どもを養うために、悪いこととは知りながら人間に迷惑をかけていました」との打ち明け話。「今後二度と悪いことはしないので命だけは助けてください。先ほどの話がうそではない証拠に、命の次に大切なものを今夜差し上げましょう」と手をあわせて懇願するので、浪人も同情して許すことにしました。そしてその夜、浪人宅に昼間約束したカッパの夫のサラが投げ込まれました。カッパがくれたのはサラではなくカッパの頭だったという言い伝えもあります。（神奈川県の名水＆情報より）

## ■新田間川（あらたまがわ）

「新田間川」は、西区南浅間町と岡野の境界付近で「帷子川」から分流し、横浜駅西口方面に向かって流れ、内海橋で直角に曲がり「幸川」となり相鉄線横浜駅の脇で「帷子川」に再合流する約1.4kmの派川です。元は江戸時代の新田開発のための用水路で、1913年（大正2年）に初めて川の名がつけられました。当初、川上の水源はなかったのですが、関東大震災の後の復興事業で帷子川に接続し、以来、帷子川の派流となりました。かつては内海橋付近から駅前方向に直進し、東口の月見橋の箇所で帷子川に合流していましたが、この部分は西口の開発にともない埋立てられました。

また、新田間橋の脇で分流していた派川も、帷子川分水路建設事業にともなって埋立てられ、新田間川と派新田間川が分断された現在の姿となっています。

▲帷子川分水路　よこはまの川と下水道より（横浜市環境創造局提供）

▲新田間川とそごう

▲動く歩道（ベイクォーターとそごう）

◀ベイクォーターとそごうの歩道に表示されている標識プレート

## ■宝川（たからがわ）

かつては横浜を流れていた宝川は「ヨコハマポートサイドＦ－１街区第一種市街地再開発事業」が開始さた1998年（平成10年）3月に「宝川埋め立て事業」が完了し、まぼろしの川となってしまいました。

## 山

今はありませんが、幸ヶ谷公園あたりはかつて権現山とよばれる急峻な山で、戦国時代初めの古戦場1510年（永正7年）の「権現山の合戦」で、その後100年近くも続く戦国時代の口火を切った下剋上の戦いの始まりではないかと伝えられています。

江戸時代には山のすぐ下を東海道が通っていました。急峻な山の様子は当時の絵図にも描かれています。幕末に神奈川宿前面の海を埋立て、神奈川台場を築造するための土取場となり、山の高さが低くなったといわれています。

漁師町の沖合に神奈川台場が出来、明治に入って権現山を削った土の多くが神奈川宿の海辺（現在のポートサイド地区）の埋め立てに使われていたと伝えられています。

現在、権現山は標高22mの小高い丘となっていて丘の頂上部が幸ケ谷公園です。戦後、戦災復興土地区画整理のなかで公園として整備されたもので、広さは1万8千 km²（約5400坪）、100本の桜が植えられました。

▲地図と絵に見る神奈川お台場の歴史　（横浜開港資料館提供）